

評・前田 英樹 (批評家
立教大学教授)

土佐の郷土、宮地團四郎は、慶応3年(1867年)11月21日から明治元年(1868年)11月1日まで、のあいだ、一日も欠かすことなく、克明な従軍日記をしたためている。

生々しい一級史料



右文書院
2700円

紀行文の味わいすら漂わせる。戦闘の實際を簡潔に記すところでは、時に凄愴な情景が現われ、続いてすぐ陣中での楽しい酒宴の報告があったりする。湯屋と髪結いにはよく通い、三度の食事もほぼ欠かすことがない。名所旧跡にも殊勝に足を運び、世情の観察も怠っていない。文を追いながら、ますます感じるのは、この土佐郷士のしっかりとした教養であり、そこから育った明朗闊達な覚悟である。文中には、己ひとりの感想を語るところも、賢しうな述懐もいっさいない。潔いその自制が、眼前の光景を生き活きと浮かび上がらせる。人ひとりの命と直につながる昏い歴史の生々しい書きを伝えている。

今回の出版で初めて陽の目を見たこの従軍日記は、疑いなく第一級の歴史資料である。が、また現代の歴史学が、こうした性質の文章の扱いをいかに不得手とし、文の生気を味気ない事実解釈に還元してしまうか、それを想う。この種の本は、ほんとうに歴史を愛好する者の黙した精読を待っている。幕末史研究者、小美濃清明氏の細心な現代語訳と解説は、そのような精読を大いに助けるだろう。

◇おみの・きよはるは1943年生まれ。幕末史研究会主宰。著書に『坂本龍馬と刀剣』など。

郷里を発して、物情騒然の大坂、京に滞留し、藩の「御留居様」山内容堂を警護して、御所で王政復古の政変に遭遇する。やがて、官軍の旗印のもと、鳥羽・伏見の戦いに出陣し、さらに奥州征伐を目指して、江戸、壬生、白河と転戦する。最後には、二本松の激戦を経、会津若松城の包囲戦を制する。凱旋、帰郷して、藩主山内豊範から戦功により「御留守居組」加入と四人扶持を許される。日記の言葉は「千秋萬歳筆留る」で終わるが、時に團四郎「年齡三十一歳」とある。

この宮地團四郎、なかなか筆が立ち、日記は日々の細部を活写して、